

平成30年度 復興大学公開シンポジウム 報告

復興大学公開シンポジウムを3月14日（木）、仙台国際ホテルにて開催いたしました。

本シンポジウム、開会の挨拶では、復興大学事業の紹介を兼ね、学都仙台コンソーシアム 会長（宮城学院女子大学 学長）平川 新 氏より、御挨拶を頂きました。震災から8年が経過し、震災の記憶や伝承、継承が強く求められている中で、復興大学事業の果たす役割についても重要であることが述べられました。



開会挨拶（学都仙台コンソーシアム会長 平川 新氏）

第一部では東北大学 教授 災害科学国際研究所所長 今村 文彦氏より、「震災伝承と新しい防災文化」と題し、御講演をいただきました。



今村 文彦先生 御講演の様子

現在、東日本大震災を改めて科学的に振り返り、様々な研究が進んでいることが報告されました。その一つは津波研究の進展です。津波の濁流（黒い津波）の脅威、は想像を絶する力を持ったものでした。津波被害の多様性、被害の大きさや実態について、解析技術などによる研究成果を交え、現在もなお津波の科学的研究が進んでいることと、研究がすすむことで防災の考え方も変化するということが解りました。

都市部や被災地以外では、「震災」ということが記憶から薄れることも多くなった昨今、

改めて津波の脅威についての振り返りをお話し頂いたことで、今後どのように被害を小さくするかについて、災害（外力）と災害（被害）の定量的な評価を行うことが重要であり、社会の対応が問われているということも述べられました。

東日本大震災を研究分析することから見えてきたさまざまな事実から、教訓を整理し、伝承するために必要なことについて、新しい枠組みや考え方、文化として醸成が必要であることが強調されました。経験や教訓を継承するには、個々の経験を整理し、共有し、普遍化することが必要であること。また、伝承の仕組み（信仰や地域の催事等）は文化としての継続が欠かせないとし、「震災伝承モデル」が現在検討されていること、震災伝承ネットワーク協議会が設立され、具体的な取組などが検討されていることも紹介されました。

最後に新しい防災文化を形成するために、歴史に学び、世界とつながることの重要性であることが述べられました。歴史的には、神社仏閣などが震災時に津波浸水の境界に位置し、かつての暮らしの中に文化として根差していたこと、ランドマークとしての役割や情報共有や情報拡散など、文化の行き来があったことなどが紹介されました。このような歴史的過去に学び、世界的な枠組みの中で、防災（BOSAI）をとらえることが今後の伝承・継承には欠かせない取組みだとし、講演の締めくくりとされました。

今後、社会の中で、防災を意識的に学び、生活に落とし込むために、地域の文化として醸成するために、復興大学という学びの場、共有の場の存在は重要であり、人材育成の面でも取組みが重要であることを実感する講演となりました。



今村 文彦先生 御講演の様子

第二部では今年度の事業の振り返りを兼ね、復興大学を構成する4事業の事業報告を担当する事業運営大学の教職員にからの報告を行いました。

各事業で強調されたことは、共通して、人材育成について重要であることが述べられました。事業報告者については、以下の通りです。

- ・石巻専修大学 開放センター長 山崎泰央 氏
- ・東北工業大学 地域連携センター 事務長 羽生田 光雄
- ・宮城教育大学防災教育未来づくり総合研究センター 特任准教授 千田康典氏
- ・尚綱学院大学 連携交流課 課長 佐々木真理氏



事業報告の様子

第三部では、本事業に参画した学生達によるリレートーク形式による報告を行いました。東北大学、宮城教育大学、東北工業大学、東北学院大学、尚絅学院大学の学生 6 名による発表が行われました。復興大学に参加した学生の声を御紹介します。

- ・ 未知の問題への対応、柔軟かつ迅速な対応についての重要性を学んだ
- ・ 多角的で広い視野、主体性を持った行動という自覚
- ・ 答えのない問いについて議論する面白さ
- ・ 多大学、多学部の学生が集まったことによる多角的な視点
- ・ 今後の世界・人生の作り手である世代との出会い
- ・ 自分、自分たちが地域や世界を作っていくという意識
- ・ 復興大学での出会いによって人生が変わった
- ・ 途切れの無い支援が新しい交流を生み、地域に受け入れられている実感
- ・ 被災地のものづくり企業や産地を視察し、人材育成の大切さを実感した。
- ・ (企業の) 事業を継承するために、自分が主体的に活動する役目を担いたい
- ・ (教職を目指しているので) 教員として、子供達に向き合うための意識が身につき、覚悟が持てた。
- ・ 今の自分の立場や置かれている状況によって、見え方、感じ方が異なる。
- ・ 防災教育は“脅し”の教育ではない
- ・ 実際に訪れてみないと分からないことだらけ。体験することで学ぶことができた。
- ・ 小学校の教員として、防災教育に力を入れて取り組んでいきたい。
- ・ どこにいても、自分の身を自分で守れる子どもの育成に取り組みたい
- ・ ボランティア活動を通じて、地域との交流が増えたこと。
- ・ つなぐ、伝える、続けることの重要性
- ・ 地域の新しいふるさとづくりに貢献したい

以上、学生の声をご紹介します。ありがとうございました。



学生によるリレートークの様子

最後に、本シンポジウムの締めくくりとして学都仙台コンソーシアム復興大学 部会長（東北工業大学 副学長）石川 善美より、復興大学事業が、継承・伝承の在り方、学生の育成に大きな貢献ができてきていること、また広く地域社会の中で防災文化の醸成について学術機関の貢献が重要であることにふれ閉会の辞とさせていただきます。

復興大学の学びを通じ、場を提供することの重要性を強く感じるシンポジウムとなりました。4月以降も引き続き、4事業を軸に、復興大学事業が継続されます。皆様と共に、防災をつなぐ場、学びをつなぐ場となるよう努めたいと考えております。



閉会挨拶（復興大学部会長 石川善美）